

文化 第80巻 第3・4号 一秋・冬一 別刷
平成29年3月25日発行

「日本人らしさ」とフランス移住
—在仏日本人の移住談内に見る日仏への表象の特徴
と主体の複数性—

矢 野 禎 子

「日本人らしさ」とフランス移住 —在仏日本人の移住談内に見る日仏への表象の特徴 と主体の複数性—

矢 野 禎 子

1. はじめに

今日の日本では、外国へ旅行に行ったり留学したり、あるいはそこに生活の場を移すことすらも、一握りの人びとに与えられた特別な機会ではなくなってきていると言えるだろう。「特別」とは程遠い筆者も、日本の大学を卒業後にフランスへ留学する機会を得ることができたし、当初は1年間の滞在を予定していたのに最終的には4年もフランスで過ごし、また滞在中そこに生活する日本人と出会う機会が少なからずあった。長年住んでいる人、これから長きにわたり滞在したいと考えている人、後ろ髪ひかれる様子でフランスを後にする人、一年そこそこで「満腹」になり入れ替わっていく人びとと、滞在の様子や目的は様々であったが、日本人は稀な存在ではなかった。自身のフランス滞経験とそこで生活する日本人との出会いの中で、筆者は「なぜ日本人フランス滞在者はフランスへ移り住み、どのようにフランスでの生活を捉えているのだろうか」という問題意識に目覚め、日本人にとってフランス移住はどのような意味を持つのだろうかと考えるに至った。

筆者は日本へ帰国し友人などと会う際、「フランス？素敵！おしゃれ！カッコいい！すごい！」と決まったように肯定的なイメージばかりを（筆者がどんなに反対しても）付与される経験をした。また、フランスから日本へ帰国してからはテレビや雑誌などでも日本人海外生活者の生活を紹介するものを目にすることが増え、なおかつそれに目が留まることも増えたが、それらがある一側面のみを強調しているようで違和感を持つことが多々ある。留学や海外でのボランティアを募る広告などで、様々な国や年齢の人びとが笑顔で肩を組み「均質化」され、その素晴らしさを強調した写真を目にすると何となく落ち着いた

い。これらが描写する海外生活や異文化／言語を生きる様子は非常に「単純化」されているという印象がある。筆者はフランス滞在中の様々な経験を通して、フランスが大好きにも大嫌いにもなり、日本人であることに一種の誇りを感じたり嫌悪したり、海外に住んでいることに感謝したり絶望したりと大変に忙しく、固定された唯一の属辞を自身の経験に与えることの不可能性を強く感じることもある。そのため、調査協力者の語りをもとに構築した「移住談」を研究のコーパスとして選択し、日本人のフランス移住経験が持ち得る意味を多角的な視点から研究したいと考えた。本稿ではそのなかでも、彼らの語りに現れる日本／フランスに対する表象から、彼らがどのようにフランスやそこでの生活を捉え、その中に位置しているのかを考えてみたい。

以下では、まずフランスに滞在する日本人に関する先行研究から、日本人フランス滞在者の特徴と、彼らが抱く日本（人・文化）とフランスへの表象についてまとめる。次にアメリカの語学学校での英語の授業観察や関係者へのインタビューを用いた研究で指摘された異文化／言語への「適応」の形について述べ、本研究がよりどころとする主体の「複数性」について説明する。そして、本研究でコーパス構築に使用したインタビュー手法と「移住談」の特徴を述べ、コーパスの日仏の表象に関連する箇所を特徴別に分析する。

2. 日本人フランス在住者の特徴

日本において共有されているフランスのイメージは歴史や芸術、ファッションやグルメなどと結びついた肯定的なものが多いように思われる。岩崎が行った日本人大学生のフランス人のイメージに関する調査（岩崎 2007）においても、フランスに対して提示されたイメージは「国民性」、「芸術・ファッション」、「料理」、「言語」、「外見」といった要素に関連しながら全体的に肯定的な形容詞が否定的な形容詞の数を上回っている。しかし、フランスに住む日本人へ日本人とフランス人に関するイメージを3つ挙げてもらった調査では必ずしも肯定的な形容詞が多いわけではないという。また、フランスに滞在する日本人が提示する両国に対する表象の興味深い特徴として、それらが「個人主義／集団主義」のように明らかな対句をなすものが多いことが挙げられている。この在仏日本人の日本（人・文化）とフランス（人・文化）に関する表象が、一方に肯定的あるいは否定的な偏りを見せることが少なく、また対句をなす形で提示されるという特徴は、Yatabe の行ったパリ在住日本人に関する統計的な

アンケートによる研究 (Yatabe 1994) においても指摘されている。Yatabe はこれを在仏日本人が日本に対するステレオタイプともいえる社会的に流布したイメージを元にフランスに対するそれを構築している表れであるとしている。加えて日仏両国が経済や治安、文化や教育などの側面で一種対等な関係にあることや、日本人のフランス移住が「伝統的な移住」、つまり経済的な生活の向上を目的とした移住とは一線を画していること、移住者の教育水準の高さ (Yatabe 1993・1994) も、この特徴の説明要因となりえるだろう。「伝統的な経済移住」でないならば、なぜ日本人はフランスへと移り住むのであろうか。Duteil-Ogata がトゥールーズ在住の 30 - 40 歳のフランス人と結婚した日本人女性を対象に行った調査 (Duteil-Ogata 2007) では、彼女たちの長期滞在を決定的なものとする要素として、(文化的または構造的観点での) 日本社会への不満と国際結婚が挙げられている。生活の質の向上、追求というケースにおいては日本人のフランス移住は「伝統的経済移住」と同じである。しかし、例えばアフリカ諸国などからの移住のように母国と移住先間に非対称な関係、つまり支配／被支配や大きな文化差異などがある場合には、移住者は「私たち nous」／「彼ら eux」という対立を用いながら母国に肯定的な表象を提示するという特徴があり、日本人フランス移住者の持つ両国への表象提示の傾向はこれに当てはまらない (Yatabe 1994)。

Yatabe は在仏日本人のこの「客観的」で「バランスのとれた」表象提示の理由として、彼らの大多数が日常生活においてフランス人から差別を受けることがないと証言していることも挙げている。フランスにおいて日本人はどちらかと言えば肯定的な先入観の利益を受けていると言え、さらに公共の場においてよそ者と感じると答えた人はわずか 22.7% であり、これは注目すべき低い数字である (Yatabe 1993 : 208)。岩崎も個人の自尊感情に「日本人としての誇り」が関与しているとしたうえで、外国人からの日本人に対する高い評価への認識は日本人の誇りと関連があると述べている (岩崎 2007 : 112)。フランスでの「日本人に対する肯定的なイメージ」の中で、在仏日本人は彼らの民族的なアイデンティティの中で縮こまったり、受け入れ先の人びとや文化を攻撃あるいは拒絶せず、異文化の中でのアイデンティティの不安定さや変動、多様性を楽しむことが可能なのである (Yatabe 1993 : 208)。

3. 異文化／言語を生きる主体とそれへの適合

このように、母国に好意的、移住先の国に否定的な表象を抱く傾向にある「伝統的な経済的移住者」とは異なり、在仏日本人は両国に対して対立項を形成する表象を抱き、一種中立的な立場をとる傾向にある。しかし一部の在仏日本人、特に職業上の理由でフランスへ移住した者の妻などのグループのフランスでの生活は、「日本世界」の再現である場合があり、この場合はフランス社会との関係構築は最小限に抑えられるという（Yatabe 1993 : 201-203）。そのグループはフランス社会を敵対する場として捉える傾向があり、多くははっきりと日本社会へ好意的な姿勢を示し、自身の「日本人」としてのアイデンティティを主張、さらに同国出身者との関係性を構築することを好む傾向にある（Yatabe 1993 : 206）。岩崎は在仏日本人が日本人集団との接触を重要視する場合の理由として、安心するなどの情緒的な要素と生活情報などの便宜的な要因を挙げており、調査内で日本人集団について言及するのは滞在期間が比較的短く、言語運用力や自己主張的なコミュニケーションに不慣れであるとする者が多く、精神的な意味で日本に依存していると述べる（岩崎 2007 : 105-107）。これらの先行研究から、日本人という所属意識や日本人集団に依存する人びと、つまり移住先の社会へ積極的に関わることがない人びとはまず、移住先でのコミュニケーション力、言語習得が十分でない、あるいはそれに積極的ではないことがうかがわれる。在仏日本人のフランス語の運用力が高くなると、日本人集団は煩わしいものとなり、日本人であることを意識する機会は極端に減少する傾向にあるようだ（岩崎 2007 : 181）。このように言語の運用力と社会への適応には密接な関係があることは明らかである。

言語習得は単なる文字と音の並び、情報交換のツールに留まらず、文化や社会と密接な関係があるものであると考えられる。文化やコンテクストによって適切な言語行動があり、適切な言語使用を身に着けることは社会生活において重要な要素である。そのため外国語としてのフランス語教授法でも、クラスにおいて学習者が学習言語の言語学的な要素だけでなく、言語活動に付随する社会的あるいは文化的な側面をいかに習得するかという議論は一つの柱となっている。しかし、外国語教授法のこの考えには、一方で適切な言語行動を教える必要性と、他方で教えたことを表現するよう指示することで学習者がそれまで培ってきた母語や文化との隔たりに苦しんだり、そのアイデンティティが失われる危険性が、まさに共存しているという認識が潜在しているのではなからう

か。窪田はアメリカの語学学校のアメリカ英語の社会言語学的適性を学習するクラスの観察や受講者、講師へのインタビューを行った（窪田 2005）。受講する学習者の多くが会話における戦略を学習するの必要に加えて、アメリカ人の言語行動、またその背景にあるアメリカ人の考え方についても学習する必要があると考えているのだが、クラスでの学習者の言語行動を観察すると、アメリカ人のようにふるまおうとしているグループと、そんなそぶりがなく母語を話すときと同じように英語を話すグループが存在するという。外国語教授／学習においては、文法や発音といった要素から慣習や文化的な側面に至るまで、「ネイティブに近づくこと」が習得度合いを図る尺度のように考えられる傾向にあり、異文化・言語間コミュニケーションで齟齬が生じるのは学習者がネイティブの規範を完全に習得できないからであると考えられる傾向がある。しかし窪田は、講師へのインタビューを通して、「ネイティブのようになること」がむしろ受け入れ国の社会への適応に不利に働くことがある可能性を指摘している。インタビューを受けた講師はクラスで社会言語学的適性を教える重要性を認めながらも、学習者の母語のアイデンティティ保持を重要視していること、また母語話者は非母語話者がアメリカ人のアイデンティティを演じることに好意的ではない可能性を語っている。そして、窪田の行った学習者へのインタビューの分析によると、彼らがアメリカ人のような言語行動をとろうとするにしろしないにしろ、母語と学習言語、教室内と教室外、同国出身者の多い場とそうでない場など、発話状況によってふさわしいと思われるアイデンティティの構築あるいはパフォーマンスの実行を行っているようなのである。つまり、異文化・言語の学習者は、学習言語の特徴やその背景にある文化に対する認識を深めながらどのように振る舞うことが適切であるかを自身で場面や状況に応じて判断し実行しているのだ。言語運用力を向上させたいと考えていても、ネイティブスピーカーのようになることが異文化社会への適応を保証するものではないこと、つまり自身の母語（文化）のアイデンティティを保持する姿勢が異言語／文化に適応するのに好ましい場合があるという重要な指摘がなされている。

4. 主体の複数性とフランス移住

窪田のアメリカ英語の習得に社会言語学的適性の必要性を感じる学習者に関する研究からは、彼らが使用する言語や状況に応じて彼らなりにふさわしい

と考える「アイデンティティ」を構築したり演じたり、「パフォーマンス」を行ったりして状況に適応していることが明らかとなった。このことは社会学者 Lahire の、我々社会的存在はみな「複数的存在」であるという主張を想起させる。彼は著書で主体やグループの複数性を強調する必要性を、人文社会学が陥りがちな研究対象グループあるいは主体の過度の一般化あるいは均質化、そして社会的行為を統合的かつ体系的な方法で捉えようとする傾向から説明している (Lahire 2005)。例えば労働者は読書を好まない、という傾向があったとしても、そのグループ内にはきっと読書好きな人がいるだろう。グループを構成するメンバー一人ひとりが完全にそのグループの特徴に合致することは稀である。また、あるグループを構成する人びとは、それ以外にも家族構成、性別、社会的立場、宗教その他数えきれない他の社会的な「属性」がある。つまり、社会的行動やグループの均質性の追求は対象の内部の複数性を無視する形で存在することになると言える。「二枚舌」や「日和見主義」が否定的な文脈で使われることからわかる通り、社会は一主体にも均質性を追求する傾向がある。名前やマイナンバーは象徴的で、社会は私たちに常に均質的な「私」として存在し続けている幻想を与えている。しかし、職場の「私」、家にいる「私」、親と接する「私」、子と接する「私」、先輩と接する私、寝起きの「私」、夕方の「私」、日本語を話す「私」、英語を話す「私」、「私」はいつも均質的であろうか。Lahire は、主体が整合性をもって存在するためには、主体が影響を受ける社会化の規範にまず整合性があることが必要であるという。しかしながら、社会を構成する要素は実に多様であり、相互に矛盾すらはらむものであるから、その中に置かれる社会的主体が複数的で時に複数主体間で葛藤をも呈するのは当然ともいえよう。

言語人類学を提唱する Prieur は、発話主体の複数性を考慮する必要性を述べている (Prieur 2006)。彼はこれまでの言語に関する研究は発話主体とその主観性の複数性を十分に考慮してこなかったことを指摘している。言語の構造や体系などの普遍性を追求することは、発話主体の複数性を排斥することによって可能になる。しかし、発話主体はたとえ「日本語」や「フランス語」と言った範疇で一つの言語しか話せなくても、方言、話し方、家庭の特徴的な語彙など、身の回りの言語の多様性を内包している「マルチラング」であるはずである。Prieur は、これらディスコース、陳述に対する姿勢、あるいは言語の変化は、発話主体が参照する想像界の変化によって引き起こされるものであり、発

話主体の「主観的見解 positions subjectives」の変化であるとしている。発話主体とその主観性の複数性は、言語や文化の接触の状況下においてはより明白となるであろう。このように言語人類学は構造やタイプ、形に焦点を当て言語を外から描写するのではなく、不連続性、変動性、多様性に着目しミクロ的観点からのモデルの構築を目指している。また、社会学や社会言語学が主体の複数化を捉える際にまず「社会的事象」という外的要因からアプローチするのに対し、言語人類学は発話主体の「主観的見解」を取り扱う。言語人類学はこれまでの言語学や認知科学が扱いきれないこの「発話主体と主観性の複数性」に焦点を当てることで、従来型の言語学や社会言語学とは違った観点から「主体」と「主観性」を分析、記述できる可能性があるとしている（Prieur 2006 : 111-112）。

外国へ移り住む経験は、これまで主体をとりまいていた環境が大きく変わる不連続性、変動性、多様性を伴った経験である。そのため筆者は異文化／言語を生きる主体とその集団について見識を深めたいとき、グループや一主体の不均質性あるいは複数性の概念は念頭に置くべきであると考えた。紹介した日本人フランス移住者に関する先行研究においては、日本人フランス移住者の日仏に対する表象提示の傾向が浮き彫りとなり、それを説明しうる在仏日本人のプロフィールや特徴が明らかとなった。しかし、それがどのような軌跡を経て調査協力者の心理中に定着され、彼らの行動や価値観、思考と関わっているのかまでは述べられていない。そのため本研究ではインタビュー手法を用いて研究コーパス「移住談」を構築し、ミクロ的観点から分析を試みることにした。

5. 「移住談」の特徴

前章で紹介した岩崎や窪田の研究においてもインタビューという手法がコーパス構築に用いられていることからわかる通り、今日異言語や文化を生きる主体やそのアイデンティティの研究、特に教育学や社会学の分野においては対象者を様々な角度から丁寧分析できる質的調査が用いられることが多くなっている（丸井 2012 : 197）。調査対象者の「自伝的語り」、今日「ライフストーリー」と呼ばれるものの収集は、1920年代にアメリカの社会学者らによってはじまり、フランスではコーパスとしての重要性が、彼らを単なる統計的なまとまりではなく、事象の実際の行為者と考える社会学研究の流れと相まって高まっていった（Chaxel & Fiorelli & Moity-Maïzi 2014）。以前は「ライフヒ

ストーリー」と呼ばれていたが、「ヒストリー」という単語は「歴史」、「史実」といった「内容」と物語の「語り」の区別が曖昧なため、今日では「ライフストーリー」と呼ばれることが多くなった。このことから、このコーパスを用いる研究が興味を示すのは談話から読み取れる一見してわかる情報、つまり「物語内容」だけではなく、情報提供者の「語り」にも及ぶことがわかる。「ライフストーリー」の特徴は、調査協力者が彼の人生やその一部、経験や辿った軌跡、考えを、聞き手（研究者）を前に口頭で語る「共構築」の形をとることである。研究者の存在はテーマに沿った情報を収集することを容易にし、ライフストーリーが単なるおしゃべりや自分語りになることを防ぐことができる。しかしこの事実は裏を返せば、研究者の存在が情報提供者の言説を制限したり、発言を導いたりできる可能性を示唆するものでもある。そのせいもあって、面談手法によるコーパス構築は、「軟弱で簡単すぎて疑わしい」（Kaufmann 2001 : 9）などと揶揄されることがある。この批判を回避するために研究者はインタビュー方法によって引き起こされる可能性のあるほんのわずかな不具合の兆候にまで神経質になる傾向もある（Kaufmann 2001 : 10）が、社会学者 Kaufmann はこれを「不健全」ととし、民族学者の手法から着想を得た質的かつ経験的な技法で情報提供者の発言をよりどころとする今までの半構成的面談を行う技法を提唱している。インタビューのフィールドを、すでに前もって論じられ固定された理論や仮説の確認の場とするのではなく、フィールドで行うインタビューにより問題提起がなされると考え、聞き手の存在と影響を極力排除しようとするこれまでの手法とは反対に、情報提供者とその言動への適度な感情移入や共感を提示しながらテーマについての情報提供者の活発な発言を促すことを重要視している。

情報提供者に積極的な発言を促す Kaufmann のインタビュー手法を用いて構築した日本人情報提供者のフランス移住経験に関する「ライフストーリー」をコーパスとして選択した理由は、本研究では日本人フランス移住者がインタビュー内で語る彼らの経験や体験、一種の「事実」のみならず、異言語と文化を生きる主体とその主観性の不均質さや複数性、移住経験の語りを通して構築される自己イメージにも焦点を当てることを試みたいためである。以下、研究コーパスはいくつかの移民や移住に関連する先行研究に習い「移住談 *récit de migration*」と呼ぶこととする。

6. 分析したコーパスの概要と特徴

本稿で使用するコーパスは、「フランスに2年以上在住する（あるいはした）日本人」13名と2014年から2016年にかけて行ったインタビューによって構築した移住談である。インタビューは可能であればフランス語で受けてほしいと依頼をしたが、最終的には協力者の希望する言語で行った。協力者全員が日本の国籍を有し、日本語を母語としている。また協力を呼びかけるにあたり彼らから「日本人」の定義について問われることはなかったため、協力者全員が自身を日本人として認識していると言える。在仏期間を2年以上としたのは、ビザ発給の制度上日本人がフランスへ言語習得を理由に滞在する限度が通常2年であることによる。それ以上の滞在にはその他の理由をもって追加の手続きを行わなければならないため、2年以上の滞在を選択した人々は「多様性や違いに対する理解」に守られた言語学習クラスとは異なる環境に適応する必要があり、より多角的にフランス生活を捉えることが可能になるのではないかと考えたためである。

インタビュー中の質問は大きく①フランス移住の理由、②言語習得の様子、③フランス社会での生活の3つに分けられる。調査協力者の抱く日本／フランスに対する表象や見解は随所に見られたが、協力者がフランスでの生活を描写、評価したりする際、また今後の生活の場に対するビジョンを語る際に特に両国の文化や特徴の比較が頻繁に行われた。この場合先行研究が指摘するように、分析した移住談内でも対立項を構成する日仏表象に関する発話が見受けられ、また彼らの評価が極端に日本／フランス社会に好意的／否定的に偏ることは稀であった。大規模なアンケートの集計結果のみを見ると、筆者は在仏日本人の両国への対立項を構成する「すでに耳にすることの多い」表象の提示や「バランス」とするという特徴を調査協力者が冷静かつ客観的に行っているような印象を持つのだが、これらの事象を彼らの談話を通して考察すると、それは彼らが発話する際に参照するものの不連続性や変動性、複数性の現れのように浮かび上がる。なぜ、そしてどうやって「在仏日本人はフランス人に否定的なアイデンティティを結び付けることから免れる」（Yatabe 1994 : 133）のかをより詳細に理解するため、以下では移住談内で日仏の表象の対立項形成や、その中立性の確保が行われた箇所の分析結果を「一表象内の評価の逆転」、「表象と現実の乖離」、「対立項を形成しない表象提示と中立の維持」の3つに分けて提示し、いくつかの傾向を考察する。

7. 移住談¹の分析

7.1. 「一表象内の評価の逆転」

Yatabe の研究 (Yatabe 1994) において、在仏日本人が一つの表象を肯定的にも否定的にも捉えることが指摘されている。大規模アンケートの結果として「アリ (日本) とキリギリス (フランス)」が例として挙げられているが、日本人を肯定的に「働き者」と捉えるとフランス人は「怠け者」という表象が付与され、しかし「たくさん働く」ことは「人生を楽しんでいない」と否定的にも捉えられる場合があり、その場合はフランス人の「アール・ド・ヴィ」の側面が肯定的な対応項として形成されうる。インタビューの分析では、この現象が一主体内で起こり得ることがわかる。移住談内でも、調査協力者が一方、特にフランスに対して否定的な表象を提示したのちに、その表象を肯定的に捉えなおすという場面が複数観察された。以下は両国の礼儀や時間の考え方に対する発話である。

« [フランスの改善すべき点について] Ponctualité ou je sais pas euh, politesse... Euh, même juste pour faire les courses à la boulangerie, je je trouve des fois... un peu stressant. Parce que *je suis très habituée avec, le ca, cadre japonais. Mais, en même temps, c'est très... relaxant. Parce que... y a pas, y a pas... cadre très rigide, comme au Japon.* » (ヒメカ・30代・女性)

(「時間厳守や、わかんない、礼儀…。ただパン屋に買い物にいくだけでも、ときどき、少しストレスがたまる、なぜなら私はとても日本の環境に慣れてしまっているから。でも、同時にそれはとても…リラックスできるものでもある。日本みたいにとても厳格な構造がないから。)」

ヒメカは「でも」と前項と反対内容を導く語を使用しながら、いままで否定的に述べていた要素を肯定的な面に転換させている。そして、その後は先ほどまで「日本に慣れた自分には不満なフランスの側面」が日本の不満な点として浮かび上がり、バランスがとられることとなる。

¹ 協力者の名前は筆者が任意に名付けた仮名である。フランス語での発話は文法的に正しくない部分があるが、本稿では元の発言を維持することを優先している。() 内の日本語は筆者の訳であり、引用のイタリック、傍点、下線等も筆者によるものである。

以下は少々長くなってしまうがマヤ（30代・女性）の「フランスの個人主義」に対する発話である。彼女はまず「フランスで自分を悲しくさせた出来事」として、彼女のフランス人の恋人とその友人たちの会話に入れなかったことを「ここ *ici* = フランス」と「日本 *au Japon*」、「彼ら *eux*」と「私たち *nous*」、不特定の「人びと」や「他人」を表す *« les gens »* とこの語と同様に不特定の「人びと」の意味を持ちながら「私たち」を表すことのできる *« on »* という対立を形成しながら強い口調で語る。「彼ら／私たち」の対立項の形成や彼女の口調、語彙などから、フランスの「気遣いがない＝個人主義」の側面に対して彼女が否定的な意見を述べているのは明らかである。

« Pour eux, c'était pas problème. Si c'était au Japon, si, il y a quelqu'un qui ne parle pas notre langue, mais quand même on essaie de, de discuter avec lui. (...) Et en plus, on sent que c'est pas bien pour lui, si, si on ne, on ne parle pas ensemble. Mais ici, c'est les gens sont fout en fait ! »

（「彼らにとっては問題ではなかったの。もし日本だったら、もし誰か私たちの言葉を話せない人がいたら、それでも私たちは彼と話そうとする。(…) しかも、もし彼と一緒に話さなかったら彼にとって良くないと感じる。でもここでは、人びとは（そんなこと）どうでもいいのよ！」）

この後しばらくマヤはこの件に関してその時の恋人の対応や彼女の悲しんだ様子などに強い口調で発言するのだが、ひと段落すると声の調子を落としながら以下のように続ける。

« Mais... ça c'est peut-être habitude française, je ne sais pas... Ne fait pas... ne fait pas... Parce qu'au Japon, on fait, on fait vraiment attention que, de sentiment de quelqu'un d'autre. Si on fait pas mal à des autres tout ça. Mais en France les gens s'en fout en fait, ouais... Mais en inversement, c'est oui, c'est, des fois c'est, c'est, on voit que un peu méchant mais des fois c'est bien. Parce que, si on fait quelque chose, parce que j'ai envie, mais, si, au Japon, peut-être c'est pas possible de faire, comme, comme on veut parce que des fois, les gens pensent que c'est bizarre donc je ne fais pas. Mais ici, les gens dit que oh ! fais comme je veux ! ça c'est agréable hein en France. »

(「でも…それはもしかしたらフランスの習慣なのか、わからない。[他の人に注意を?] しない…しない…だって日本では本当に他の人の気持ちに注意を払う。他の人に悪いことしてないか、とか。でもフランスでは人びとはどうでもいいのよ。うん…でも逆にそれは、そう、それは時には、それは意地悪に見えるけど時にはいいことでもある。なぜならもし何かしてて、私がやりたいから、でも、もし日本だったら、それは人びと[私たち]がやりたいようにできないかもしれない、だって時々人びと[他人]が変だって思うから私はやらない。でもここでは人びとは、ああ! しなよ私の好きなように!と言う。それはフランスでは心地よい。」)

「でも mais」と前項を否定する表現で発話を再開するものの、マヤは「たぶん peut-être」や「わからない je ne sais pas」と不確かさを表す表現や不完全な文を続け、それ以下で述べられる下線部は意味内容からも語彙の点でもすでに述べられたことの繰り返しになっている。しかしその後「うん ouais」、「そう oui」と、あたかも彼女の中に存在する「声」に同意するような発言を挟みながら、フランスの「個人主義」の側面を「時々 des fois」という頻度の限定を表す表現と組み合わせながら否定的含意のある「意地悪 méchant」から対立表現「でも逆に mais inversement」を介して「良い bien」に転換するに至っている。

これらの発話から、在仏日本人が日仏の表象に関連して対立項を構築するのは「日本／フランス」に対する表象だけでなく、その表象に対する自身の見解にも及ぶことがあることが解り、フランスの一表象を否定的に述べたあとそれを肯定的に捉えなおす場合は、シーソーのようにそれに関連する日本の様子が否定的に語られ、バランスをとるかのように浮かび上がる。

マヤの発話からはこのこと以外にも興味深い指摘ができる。彼女がフランスの「個人主義」を肯定的に捉えたあと、その理由を説明する際に使用する人称代名詞に注目したい。彼女の発話には「人びと(私たち)が何かをするとき」の続きに「私がやりたいから」、「人びと(私たち)がやりたいようにはできないかもしれない」のあとに「私はしない」と、主語のねじれを含んでいる。これは学校文法的な観点からは、マヤのフランス語の運用力の不足として扱われてしまうだろう。しかし、彼女の« les gens »と« on »の使用には法則性が見受けられる(« les gens »の使用時は彼女が含まれ得ないグループに言及する

ときである) ことから、筆者は彼女が手あたり次第に人称主語を使用しているとは思えない。彼女が「見えない誰か」に同意するような様子からも、「私」と「私+他の人びと=私たち」の二つの人称代名詞を行き来することで、彼女は談話内で自身の主観的見解から表象を構築していると考えることができるのではないだろうか。

7.2. 表象と現実の乖離

表象やステレオタイプは、多様な現実を単純化しなければ成立しない。そのため、移住談内で協力者が表象を提示する際に、彼らの語る「フランス (人) は」といった表象に必ずしも彼らの生きる身近な環境と適合しないことを示す発言が伴う場合がある。以下に関連する二つの談話の一部分を提示する

« [日本の集団主義、フランスの個人主義という表象について] *On vit en pensant aux autres, au Japon. Mais en France, c'est pas comme ça en France... (他の人のことを考えない?) Non j'ai pas, je peux pas dire qu'on pense pas aux autres. On... oui... Ouais ah... euh... au travail, c'est bien de, c'est bien d'être individualiste, au travail... Mais... ah... je sais pas... J'ai pas trop de, de Français... à côté de, à côté de moi, qui sont in, individualistes. Y a que des, gens qui ont, qui pensent aux autres. Je n'ai pas, rencontré... Français, en Français, par exemple si qui... qui s'en fout de, qui s'en fout de notre.* » (アヤカ・30代・女性)

(日本では他人を考えて生活する。でもフランスでは、フランスはそんな風じゃない。[フランス人は他の人を考えないのかという質問について] ううん、他人を考えてないとは言えないけど、人びとは…うん…うん、あー、ええと…仕事ではいいこと、個人主義でいることはいいこと、仕事では。でも…わかんない、私の隣には個人主義のフランス人はあんまりいない。人のこと考える人しかいない。例えば、例えば私たちのことをどうでもいいと思ってるフランス人には私は出会ったことがない。)

アヤカの発話は、日本人の集団主義とフランス人の個人主義という表象に関して「人びと on」や「それ c'est」といった不特定あるいは一般的な事柄を示す表現によって同意することから始まっている。しかし筆者が、彼女の発話

「日本では他の人を考えて生きる」の真逆、「フランスでは他の人を考えない」を質問として提示すると、そうは言えないと否定し、「仕事の間では」という条件をつけ、個人主義を「良いこと」と評価している。このことから発話の初めでは彼女は日本の集団主義に肯定的な見解を示していたことが伺える。その後「わからない je sais pas」と不確かさを表現し、まず身近に「あまり個人主義のフランス人がいない」と述べている。それはすぐさま「人を考える人びとしかいない」に代わり、「ひとをどうしても良いと思う人びとに出会ったことがない」と、当初彼女が述べたフランス人に対する表象と真逆の観察が、発話が進むごとに強調されていく。このようにして、彼女は談話内で当初不確かであった彼女を取り巻く「反表象」の現実を確固たるものとして構築していき、同時にフランスの否定的な表象が普遍的になることを免れているように見受けられる。もう一つの例では、調査協力者はフランス人への表象を「パリジャンのステレオタイプ」としているが、パリ出身の彼女の恋人はそれに当てはまらないと述べている。

« [フランス人の表象について] Pour moi, ils sont... *C'est difficile non ? Parce qu'ils sont tous mélangés peut-être.* Hmm pour moi c'est c'est le cliché de, des gens... parisiens, par exemple... euh qui mangent toujours baguette, du fromage du vin et... il fait le, le plainte, toujours. Et... *c'est pas forcément toujours mais ils font souvent je crois... Mais non ils sont sympas ils sont sympas ouais.* (あなたの恋人は?) Euh non. *Ouais ça m'étonne mais oui.* Il vient de, de Paris, aussi. *Mais, il est pas du tout chiant.* Il est pas chiant... *Ouais il est très orga très organisé...* Et euh nous on peut, en fait, *non on peut discuter beaucoup de choses, très sérieusement et...* *Ouais c'est bien. Il est différent je pense, je pense.* » (リナ・20代・女性)

(私にとっては彼らは…難しくない? 彼らはたぶんみんな混ざっているから。うーん私にとってはパリジャンへの常套句、例えばいつもフランスパン、チーズ、ワインを食べて、文句ばっかり言って。それで…いつもとは限らないけどよくそう思う。ってちがう、彼らは感じ良いよ、うん。[私の彼はパリジャンの表象と] 違う。うん、驚くけどそうなの。彼パリ出身だし。でも全然面倒くさくない。彼は面倒じゃない。うん、とても計画性があるって…私たちは実際、ううん、私たちはとても真面目なたく

さんのことを話し合うことができる。うん、それは良いこと。彼は違うと思う。)

彼女のこの談話を「表象に対する見解」と「パリジャンへの表象への見解」の二つに分けて考えてみたい。まず、様々な背景を持つ人びとが構成する「フランス人」へイメージを与えるのが難しいとする発言からは、彼女が、表象が現実を単純化する、または現実から乖離した側面を持っていることを認識していることがうかがわれる。「いつも *toujours*」を使用してパリジャンのイメージを描写することで、彼女の持つフランス人への表象、「パリジャンへの常套句」の極端な側面が強調される。しかしその後「いつもじゃない」と頻度の表現を下げていることから、彼女は提示したステレオタイプが全く現実から隔離されたものだと捉えていない可能性も見えてくる。パリ出身の恋人がパリジャンの表象に当てはまらないことを「驚く *ça m'étonne*」と表現していることは、上記の考察の裏付けとなりえるであろう。リナはパリジャンへの「常套句」を提示した後、「いいえ」と否定を挟み「彼らは感じが良い」と述べている。「常套句 *cliché*」はステレオタイプ同様、否定的な含意のある語である。そして彼女の提示した「文句ばかり言う」という表象も否定的な意味で捉えられるものであるから、彼女はそれに対して肯定的な見解を示しバランスを保っている。しかし、「パリジャン(＝フランス人)らしくない恋人」を「全然面倒ではない」と描写していることから、「フランス人＝面倒」という見解が浮かび上がり、彼女の抱くフランス人への表象は否定的な側面を持っていることが再度浮かび上がる。「彼とは真面目な話し合いができてよい」という発言も、「フランス人とは真面目に話し合いができない」ことを暗示している。さらに「自分の恋人は違う」と述べていることから、フランス人に表象を提示することは難しいとしながらも、彼女にとっては表象に当てはまらない者の方が特別な例であると考えることができる。この談話からはリナが絶えず現実とステレオタイプと参照先を変えながら見解を変化させているかを垣間見ることができる。

両協力者の発話に共通して現れる興味深い点は、前言を撤回、あるいはそれに反する事柄を述べるときは、前項で見たマヤの発話の特徴と同様に「うん *oui, ouais*」や「いや *non*」などの同意や否定の表現を挟んでいることである。彼女らが発話を進める際に、インタビューの発話には現れない「自らの内なる

声」を聞き、呼応している可能性が見えてくる。

7.3. 対立項を形成しない表象提示と中立性の維持

ここまで、一つの表象に対してそれを否定的／肯定的の両方の見解を提示する例と、言及した表象に例外を提示する例を見てきた。以下では提示した表象が「表裏一体」の形で対立項を形成しない中で日本／フランスへの見解のバランスを保つ発話を分析する。以下の引用で調査協力者は、フランスでの生活を「気に入っている *ça me plaît*」と肯定的に捉えている発言から談話を開始するが、まずすぐにフランスの悪い点を「もちろん *bien sûr*」で導入し、肯定的意見を中和する。

« [フランスでの生活について] *Ça me plaît. ... Bien sûr il y a des choses euh... parce qu'en France, c'est pas, très bien organisé, comme le Japon, c'est pas pas pratique c'est... euh il y a des gens qui sont pas... qui sont pas sympas. Mais... ...ça va, parce qu'au Japon, ...euh des fois je trouve que, c'est un peu, trop gentil, trop... trop d'informations... Trop de... pour moi, c'est fatigant aussi. Par exemple, à la gare, euh des fois il y a le train xxx qui sont en retard, juste une minute de retard, il annonce, il le parle parle parle parle et... ça une fois ça suffit, on comprend on a pas besoin de ...toujours écouter euh excuse. (先ほど言及していたが、フランスには感じの悪い人がいる?) Y a des gens qui, critiquent des Asiatiques par exemple. » (アリサ・20代・女性)*

(気に入っている。もちろんあるけど、えっと…だってフランスは日本みたいにあんまり段取りが良くないし…えっと感じの悪い人がいるし。でも…大丈夫、だって日本は…時々、優しすぎると思う。多すぎる、私にとっては情報が多すぎる、それは疲れることでもある。例えば駅で、時々電車が遅れたとき、1分の遅延だけでも、アナウンスする、喋る喋る喋る…一度で十分、わかるからいつも謝罪を聞く必要ない。[感じの悪い人びとについて] 例えばアジア人を非難する人がいる。)

フランスの不満な点として「段取りの悪さ *pas bien organisé*」や「不便 *pas pratique*」な側面を日本でのそれとの対比の中で挙げている。しかしこの談話内でアリサはそれを肯定的に捉えなおすことはない。そして不満が口をつい

て出るにも関わらずフランス生活を気に入っていると表現した理由として、日本の不満な点に新たに触れている。この日本の不満な点として挙げられた「情報過多 trop d'informations」「親切すぎる trop gentil」は、「私にとっては pour moi」「疲れることでもある fatigant aussi」という表現を伴うことで彼女の評価が普遍的な印象を持つことから免れている。フランスの不満な点としてもう一つ挙げられた「感じの悪い人がいる il y a des gens pas sympas」ことを、日本の「親切」(彼女にとっては過剰であるが)という表象と対峙する「不親切」と関連付けられているのではないかという直感で筆者はさらなる発言を促したが、彼女の回答を今まで彼女が言及した両国への表象と関連づけることはできない。彼女は、フランスでの生活を肯定的に表現したあと、フランスの不満な点を説明し、「でも大丈夫 mais ça va」とフランス生活を再度肯定、日本の不満な点を評価が普遍性を帯びないようにしながら提示している。様々な側面に対するニュアンスづけられた評価の並列によって、彼女が見解のバランスを保持していることがわかる。

7. 分析結果のまとめ

主体や発話主体の複数性の概念を念頭に置き、在仏日本人が持つ日仏に対する表象についての先行研究の結果である「対立項の形成」や「バランスの維持」を彼らの「語り」を通して分析することで、いくつかの特徴と興味深い点を明らかにすることができた。まず、統計的アンケートにおいて、在仏日本人が抱く両国への表象は肯定的にも否定的にも捉えられることが指摘されていたが、談話を分析することによりそれが一主体内でも起こり得ることがわかった。またフランス語でなされた発話を詳細に分析することで、その表象は主体が自身の経験から、様々な想像界を参照しながら談話内で構築している可能性も垣間見られた。次に、日本人が提示する表象は必ずしも彼らの身近な環境とは合致していないことに注目した分析では、協力者が抱く「ステレオタイプの」な表象とそれに適合しない彼らをとりまく現実を通して、彼らは談話内で見解のよりどころを変化させ、彼らが提示する表象が普遍性を帯びることを避ける傾向がうかがわれた。また「そう／いいえ」など、談話中に現れない「声」に対しての返答を境に提示した見解の確実性を高めたり、それに相反する言動を導入したりするという特徴も観察された。最後に引用した移住談では、調査協力者は日仏に対して対立項を構成する要素を提示せずに、自身のフ

ランスでの生活に対する見解が肯定的に偏りすぎることを防ぎ、なおかつ日本への不満点が普遍的にならないような表現を使って両国への評価のバランスをとる傾向が観察できた。

以上のように移住談の分析からは、在仏日本人の一見客観的で体系立った日仏両国への表象提示は、彼らの異文化／言語を生きるという変動性を伴う経験を語る中で揺れ動きながら表現されたり、時には発話の場で「内なる声」と対話しながら構築されうるものであることが見て取れた。このように、移住という不連続性の経験は主体の「複数性」の現れる典型的な場であると考え協力者の「語り」を詳細に分析するアプローチは、大規模なアンケートで明らかにされる集団に共有される表象の代表例やその傾向、変遷とは別の形で主体や集団の抱く表象を浮き彫りにしてくれるのである。

8. 今後の課題

本稿では、在仏日本人が持つ日仏に対する表象について、主に統計的な調査を実施した先行研究の指摘を調査協力者の「語り」である「移住談」をコーパスに選択しより詳細かつ多角的に分析することによって、先行研究では扱われていなかったいくつかの具体的な表象提示方法の特徴や、その過程において見られた彼らの見解の複数性を明らかにし、また「内なる声」の存在などいくつかの興味深い言説の特徴を観察することができた。

しかし、今回紹介した分析と考察が網羅的な結果にいたるためには、インタビューの数を充実させる必要があることは明らかである。また、コーパスの特性上、構築と分析には膨大な時間がかかるため、小説やエッセイなども資料にしながら研究を続けていく必要性があると感じた。移住談の魅力は何といってもその情報量の多さであるが、それに惑わされてテーマが拡散してしまう危険性と常に隣り合わせでもあろう。インタビューに関して、協力者の母語ではない言語で行うことは、言語運用力の側面で情報の量や発話を制限しかねないという懸念があったが、今回の分析では、母語ではないからこそその発話、熟達した語りでないことによって可能となった分析があり、フランス語でのインタビューは協力者の同意が得られる限り今後も継続していきたい。

参考文献

- BERTAUX Daniel, *Les récits de vie : Perspective ethnosociologique*, Paris, Nathan, 1997.
- BORNAND Sandra et LEGUY Cécile, *Anthropologie des pratiques langagières*, Paris, Armand Colin, 2013.
- DEPREZ Christine, « La langue comme « épreuve » dans les récits de migration », in *Bulletin suisse de linguistique appliquée*, n°76, Institut de linguistique Université de Neuchâtel, 2002, pp.39-52.
- DESCOMBES Vincent, *Le parler de soi*, Barcelone, Gallimard, 2014.
- GIACOMI Alain, « Récits de migration et construction d'images identitaires », in *Le récit oral*, BRES Jacques (dir.), Université Paul Valéry-Montpellier III, Praxiling, 1994, pp. 297-308.
- KAUFMANN Jean-Claude, *L'entretien compréhensif*, 3^e éd., Paris, Armand Colin, 2011.
- KAUFMANN Jean-Claude, *Ego*, Paris, Nathan, 2011.
- KAUFMANN Jean-Claude, *L'invention de soi*, Paris, Armand Colin, 2004.
- KERBRAT-ORECCHIONI Catherine, *L'Enonciation : de la subjectivité dans le langage*, 4^e éd., Paris, Armand Colin, 2009.
- LAHIRE Bernard, *Portraits sociologiques : dispositions et variations individuelles*, Paris, Nathan, 2002.
- LAHIRE Bernard, *L'homme pluriel : les ressorts de l'action*, Paris, Armand Colin, 2005.
- MAZIERE Francine, *L'Analyse du discours*, Paris, Presses universitaires de France, Coll. Que sais-je ?, 2005.
- MESURE Sylvie, SAVIDAN Patrick, *Le dictionnaire des sciences humaines*, Paris, Presses universitaires de France, 2006.
- NAKAGAWA Hisayasu, « Jusqu'où suis-je moi ? », in *Analytica*, n°55, Paris, Navarin, 1988, pp.85-90.
- OESCH-SERRA Cecilia, « Le récit de migration : organisation et exploitation du modèle à des fins identitaires, par des migrants italiens à Neuchâtel (Suisse) », in *Le récit oral*, BRES Jacques (dir.), Université Paul Valéry-Montpellier III, Praxiling, 1994, pp.309-319.
- PRIEUR Jean-Marie, *Linguistique barbare*, Université Paul Valéry-Montpellier III, LACIS, 2005.
- PRIEUR Jean-Marie, « Contact de langues et positions subjectives », in *Langage et société*, n° 116/juin, 2006, pp. 111-118.
- ROBERT André désiré et BOUILLAGUET Annick, *L'analyse de contenu*, 2^e éd., Paris, Presses universitaires de France, Coll. Que sais-je ?, 2002.
- SIBONY Daniel, *Entre-deux : l'origine en partage*, Paris, Edition du Seuil, 1991.
- YATABE Kazuhiko, « Des Japonais en France », in *Pratiques et représentations sociales des Japonais*, COBBI Jane (dir.), Paris, L'Harmattan, 1993, pp.196-217.

- YATABE Kazuhiko, « Auto-image et hétéro-image : représentations du Français et du Japonais chez les migrants nippons en France », in *Mots*, n°41, 1994, pp.129-152.
- 岩崎久美子（編著）（2007）『在外日本人のナショナル・アイデンティティ―国際社会における「個」とは何か』明石書店
- 窪田光男（2005）『第二言語習得とアイデンティティ―社会言語学的適切性習得のエスノグラフィー的ディスコース分析』ひつじ書房
- 丸井ふみ子（2012）「アイデンティティ研究の動向―異文化接触・言語との関係を中心に―」『言語・地域文化研究』pp.193-209. 東京外語大学大学院
- 矢野禎子（2016）「海外移住と言語使用―日本人フランス移住者の移住談にみる主体と主観性の複数性―」『フランス文学研究』pp.27-40. 東北大学フランス語フランス文学会
- CHAXEL Sophie, FIORELLIE Cécile, MOITY-MAÏZI Pascale, « Les récits de vie : outils pour la compréhension et catalyseurs pour l'action », in *Interrogations* ?, N°17. L'approche biographique, janvier 2014 [en ligne],
<http://www.revue-interrogations.org/Les-recits-de-vie-outils-pour-la>（2016年7月1日閲覧）.

« Nipponité » et migration en France : Les caractéristiques des représentations sur le Japon/la France et la pluralité du sujet dans le récit de migration

Teiko YANO

D'après des études sur les Japonais vivant en France, nous constatons qu'ils possèdent certaines caractéristiques quant à la construction de représentations sur leur pays d'origine et leur pays d'accueil. D'abord, les représentations qu'ils attribuent à ces deux pays forment souvent une opposition telle que « groupisme/individualisme », « fourmis/cigales ». Puis, les Japonais en France n'émettent pas d'avis totalement favorable ni défavorable sur l'un des deux pays. Cela peut s'expliquer non seulement par le fait que la migration des Japonais en France n'est pas d'ordre « économique classique » mais aussi, par le fait qu'ils sont rarement les cibles de discriminations en France. Cependant, les résultats obtenus à l'aide d'enquêtes quantitatives ne mentionnent pas le processus complexe et intéressant de ces constructions. Afin de réfléchir de plus près et de mieux comprendre ces constats, je me suis délibérément référée à la notion de pluralité du sujet pour faire avancer la recherche. La migration est une expérience de déplacement, de rupture et de mutations. Dès lors, il semble nécessaire d'y réfléchir en prenant en compte la pluralité du sujet et sa subjectivité. L'envie d'éclairer les sens que peut avoir la migration des Japonais en France sans trop recourir à la simplification ni à la généralisation abusive, m'a amenée à choisir l'entretien afin d'élaborer le corpus de cette recherche. A travers des analyses de « récits de migration », j'ai mis en évidence quelques possibilités de processus mis en œuvre pour construire des formations caractéristiques de représentations par les Japonais en France, lesquelles sont la formation d'oppositions et le maintien de la neutralité. Les informateurs se réfèrent à plusieurs éléments ainsi qu'à des expériences vécues ou imaginaires et à des représentations collectives pour construire leur discours et changer leurs

positions subjectives, ce qui fait que leurs constructions de représentations envers les deux pays sont équilibrées. Des caractéristiques discursives qui accompagnent ces phénomènes, telles que « la réponse à la personne intérieure » ou « l'introduction d'incertitudes » ont également été observées.